

源氏物語和歌の英訳

— 故長谷川教授遺稿 —

1. はつくさのわかばのうへをみつるより

たびねのそでもつゆぞかはかぬ

若紫の巻

Since first that tender grass I viewed,

My heart no soft repose e'er feels,

But gathering mist my sleeves bedews,

And pity to my bosom steals

2. まくらゆふこよひばかりのつゆけさを

みやまのこけにくらべざらなむ

若紫の巻

You say your sleeve is wet with dew,

'Tis but one night alone for you,

But there's a mountain moss grows nigh

Whose leaves from dew are never dry.

3. うつせみのはにおくつゆのこがくれて

しのびしのびにぬるるそでかな

空 蟬 の 卷

Amidst dark shadows of the tree,

Cicada's wing with dew is wet.

So in mine eyes unknown to thee,

Spring sweet tears of fond regret.

4. あさひさすのきのたるひはとけながら

なごかつららのむすぼほらむ

末 摘 花 の 卷

The icicle hangs at the gable end,

But melts when the sun is high,

Why does your heart not to me unbend,

And warm to my melting sigh?

5. すずむしのこゑのかぎりをつくしても

ながきよあかずふるなみだかな

桐 壺 の 卷

Cry as hard/as I may with the assiduousness/of
the bell-ringer in the grass,/Ah, my tears know no
stopping/all the long night through !

6. いとどしくむしのねしげきあさちふに

つゆおきそふるくものうへびと

桐 壺 の 卷

On the waste ever more ringing with cries of tiny
insects, thou, guest from above the cloud, hast added
a fresh layer of dew!

N.B. For the authoress of the poem the visit of the
Emperor's messenger is an occasion for more tears.

7. うらみてもいふかひぞなきたちかさね

ひきてかへりしなみのなごりに

紅葉 賀 の 卷

No amount of complaint/can be of any use, I know:/
the waves came rushing after one another/and
went back again,/leaving a cruel vacancy in my
heart.

8. どまるみもきえしもおなじつゆのよに

こころおくらむほごぞかなしき

葵 の 卷

It is in the same world/of dew's that one expired/
and the other stays:/it's vain (f you t) set your heart/
on anything so ephemeral.

9. はなをみてはるはくらしつけふよりは

しげきなげきのしたにまごはむ

竹河の巻

In looking on the flower/I've spent/all those
spring days;/from now onward shall I/under the
thick leaves of grief go roaming with a broken heart.

10. あとたえてこころすむどはなけれども

よをうちやまにやごをこそかれ

橋姫の巻

Not that clean away from the world my mind's
serene and lucid, only with life bitter sickened
am I tarrying awhile at Udiyama.

〔註〕

1. 癡病わらわの加持祈禱に北山の聖を訪れた源氏が幼い頃の紫の上を始めて見て送つた歌。

2. 1の歌に対する祖母の尼君の返し。

3. 「うつせみのみをかへてけるこのもとに

なほひとがらのなつかしきかな」

と云う源氏の歌を見た空蟬の感懐。

4. きぬぎぬになおちとけぬ末摘花の「ゆるしなき御氣色」をうわべはやわらかになじるとみせた源氏の言葉。

5. 桐壺の更衣逝去の後帝の御使で幼子の源氏と母北の方の佗住居を見舞つた靱負の命婦が暇を告ぐる折の歌。其時情景は原文に次の様に述べてある。

「月はいり方の空きよう澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。」

6. 5の歌に対する母北の方の御返し。

7. 源氏を迎えた源の内侍が頭の中將の悪戯に遭つた時の歌。「うらみ」は浦見「かひ」は「貝」に懸け、「たち」「かさね」「ひき」は波の縁語。

8. 葵の上の死に際し送られた六條御息所の「ひとのよをあはれときくもつゆけきにおくるるそでをおもひこそやれ」に対し御息所の執念の深さを暗に諷する源氏の返し。「きえし」は葵の上を指す。

9. 夕霧の子藏人の少將が懸想した玉鬘の姉姫の冷泉院の女御となつたことを悲しむ歌。「しげきなげき」は「繁き樹」にかけてある。

10. 源氏の異母弟八の宮の宇治の佗住居を交友の阿闍梨が訪れ齋した冷泉院の御歌に対する宮の御返し。なお院の御歌は次の通り。

よをいとふところはやまにかよへども
やへたつくもやきみをへだつる。

あとがき。 本年八月札幌にて急逝されました長谷川教授の主たる御研究の英文源氏物語辞典の御遺稿を整理中発見された和歌の翻譯中十首を選び御紹介致しました。先生の翻譯には二種類の原稿があり、一つは韻を踏んだ弱強四脚の四行詩の形式に依るもの、他は行間に区切りをつけた散文に近い形式のものであります。

前者は末摘花の途中迄の歌を少々とびとびに訳されて六十九首あり、本歌はなく英文のみ記されてあります。前掲十首中、最初の四首は此原稿に依るもので、従つて本歌は筆者の推定に依るものであります。後者の方は物語の順を追うて、先生の日本国字論（昭和七年・岩波書店発行）に主張された独自の方式のローマ字に依り本歌が記され、その下に英訳が書かれてありまして、其数は七百九十余首に及び、源氏五十四帖の和歌の全訳であります。前掲十首中後半六首は後者より選んであります。

此二種の翻譯のいずれが先生の意に適つていたものか今は知る由もありませんが、前者は英詩の形式を重んじ比較的自由的な翻譯で、後者は極力原文の意に近い事を目指されたもの様であります。尙和文の註はすべて筆者の老婆心の蛇足、妄言平に御高免を乞う次第であります。

(28.11.30 藤島主殿記)